

P32-33

(タイトル)

Tiny Lights of the Sea

Kobe Pearls, Hyogo

(リード)

透明の奥に様々な色を宿す複雑な真珠の色。それは人と貝と海が織り成した神秘の色だ。

(メイン写真左から)

ピンクの最高ランク

形の歪なバロック

クリーム色

ナチュラルカラーの最高ランク

ピンクのナチュラルカラー

ブルーのナチュラルカラー

形の歪なバロックナチュラルカラー

(キャプション)

アコヤ真珠は神戸で大きさや色によって選別・加工されてそれぞれが一本の「連(れん)」として流通する。左が真円で薄ピンクの最高ランク。形の歪な「バロック」も近年は個性的な真珠として人気を集めている。

P34-35

(キャプション)

上・真珠養殖に適したリアス式海岸の広がる対馬の海。

下左から

筏に吊るされた網籠で挿核前の貝を育てる。

豊かな森に囲まれた浅茅湾(あそうわん)に広がる養殖筏の浮かぶ風景。

浜揚げされたばかりのアコヤ真珠は色も形も様々。どの真珠に美を見出すか、すべて選別する人間の目にかかっている。

浜揚げされたアコヤ貝から取り出された真円真珠。核入れが成功した証でもある。真珠層には、貝と海と人の共同作業が生み出した神秘的な光が宿る。

海に面した作業小屋で黙々と浜揚げの作業が進む。真珠を抜きとるだけではなく、貝柱は食用に、貝殻は細工物の素材として分別される。

P36-37

(見出し)

神秘的な真珠の物語

(本文)

真珠の美を語る前に、まず海の神秘から話を始めなければならない。舞台は神戸ではなく長崎県の対馬に飛ぶ。

九州本土から西に約120キロ離れた対馬は、真珠の生産に適したリアス式海岸を擁する島で、三重の英虞湾(あごわん)と四国の宇和島に並ぶ三大真珠養殖地である。

11月の終わり、対馬の北村真珠養殖では朝からアコヤ貝の「浜揚げ」の作業が始まる。1年から最大2年海に浸けられた貝を揚げ、貝から真珠を収穫する作業である。一日におよそ5万個を引き上げる。

真珠の養殖はまず人工受精によってアコヤの稚貝を作るところから始まる。稚貝は2年間育てられた後、人の手により一つ一つ挿核される。核は真珠の芯になる部分でアメリカミシシッピ川産のドブ貝の殻を球形に加工したものだ。直径6mmほどの核をメスなど専用の道具を使ってアコヤ貝に挿入し、アコヤ貝の外套膜を核に添える。貝はネットのポケットに入れられ、筏で海中に吊るされる。4月から翌年の1月に引き揚げられるまで、貝は流れてくるプランクトンを食べ成長する。海には適度な栄養分がなければならず、海の状態によっても収穫高は左右される。

その間、貝の中では何が起きているのだろうか。

まず仕込まれた外套膜は分裂して核をぐるりと包む真珠袋になり、徐々に真珠層を形成していく。真珠層というのはアコヤ貝が吐き出す炭酸カルシウムを主とした成分の結晶膜が平行に積み重なった層のことだ。アコヤ貝の殻の内側は、ツルツルした虹色光沢を放っているが、これも真珠層である。つまり真珠とは外側に分泌され貝殻となる成分が、内側に向かって分泌されてできたものにほかならない。

真珠層の一つの膜の厚みは0.2～0.5 μ (ミクロン)。1 μ は1mmの1000分の1だから、仮に6mmの核に0.5mmの真珠層が巻かれたとするとその層は1000～2500層にもなる。その複雑な積層構造により真珠は独特な深みのある光沢を放つのである。

しかし、順調にすべての貝が真珠を作ってくれるわけではない。挿核が上手くいかず海中で核を吐き出す貝もいるし、途中で死んでいく貝も多い。貝にフジツボやホヤが付着すると貝が食餌や呼吸ができなくなるので、年間通して人の手で取り除いてやる必要がある。長く海に浸けておけば真珠層は厚くなり真珠の粒は大きくなるが、その分、貝が死ぬ率も高くなる。死んでも大きい真珠ができるのならいいと思いたいところだが、自然はそう都合よくはいかない。貝は死ぬ前に真珠層にならない成分を分泌し、真珠は白い石のようになってしまう。

浜揚げする冬は分泌が少なくなるが、その分緻密な層となり真珠に特別な輝きを与える。この最後の段階を「化粧巻き」という。浜揚げ前の最後の1～2週間で最終的な真珠の美しさが決まるので、最後の段階では海水温を計測し、ロットごとに抜き取り検査をして、浜揚げのタイミングを見計らう。そうやって浜揚げした段階では、挿核した貝の45～55%は死んでいて、100個の貝のうち真珠は45～55個しか取れない。形は真円ばかりではないし、色も様々だ。

目の前で、美しく化粧された薄ピンクの一粒の真珠が貝から取り出される瞬間に立ち会えることができたなら、いくつもの要素が確率的に上手くかみ合った海からの贈り物だと感じるだろう。しかし偶然であるが偶然ではない。それは人が意図した、貝と海との神秘的な共同作業の成果なのだ。

(キャプションP37)

筏で海に吊るされた貝の中で何が起きているか、それは貝を開けてみるまでわからない。人は核に真珠層を粛々と巻く貝の力に依存し、貝はプランクトンを提供する海に依存する。生命と時間を真珠層に折り込む一粒の真珠の輝きは、母なる海の色を彷彿させる。

P38

(キャプション上)

連組みの作業。上下2列はネックレスの左右にあたり、2列で1本の連になる。上下で大きさを揃えていく。作業は伝統的に真珠の色を正確に見られる北向きの窓の柔和な自然光下で行われる。

(キャプション下)

シックネスゲージで真珠の大きさを量る。9mmともなる珠は希少で高価だ。

P39

(見出し)

真珠に価値が与えられる「選別」という作業

(本文)

国際港湾都市である神戸は、世界各地への輸出のための流通の拠点として三大養殖地からほどよい位置にある。神戸のパールストリートと呼ばれる通りに目立った路面店があるわけではないが、この界限だけでも200社ともいわれる真珠業者が軒を並べている。ここに集められた真珠の原珠は加工、選別され、真珠に糸を通した連(れん)として売買され、世界へと輸出される。

神戸の役割はまずアコヤ真珠に特殊な処理を施し、美しさに磨きをかけることだ。初めに全体の黄ばみを除き照りを出す前処理を行い、次に真珠層にあるシミを除去し、最後に研磨する。長年培われた技術により粒は一層華やかな装いを得る。

そして人の目で格付けをしていく。真珠の選別作業が行われるのは北向きの窓辺と決まっている。柔和な自然光下で傷があるかないか、丸か丸でないか、粒の色はどうか、0.1mmのサイズ差まで、職人の目によって選別される。

この一連の作業の意味は、真珠の秘めた美しさを最大限に引き出し、最終選別によって真珠に価値を与えることだといっていいただろう。貝が核に真珠層を粛々と巻いてできたものに本来優劣はない。神戸で人が選別し美を見出すことによって真珠に価値が生まれ、海の中で連綿と続いてきた作業が完遂するのである。

最上級のうっすらピンクがかかった真珠の深みのある透明感と見事な真円は、日本が開発した養殖技術が結晶した揺るぎない美だ。しかし、ホワイト系やイエロー系、ブルー系の真珠、またバロックと呼ばれる歪な真珠にも個性的なそれぞれの美がある。

ピンクの真珠も青い真珠も、一粒一粒が日本の海の豊かさと多様性を反映する物語を秘めている。新しい物語はもう語られはじめている。

(加工過程の真珠の写真キャプション上から)

原珠

前処理上がり

特殊加工

研磨